

ARTICLE

文化ボランティア2019

これまでの文化ボランティアをふりかえり未来を
展望する

学習活動の「進化・深化」と社会教育施設の未来

文化ボランティアコーディネーター 太久保邦子

2002年に河合隼雄文化庁長官（当時）が文化ボランティアを提唱。その前は生涯学習ボランティア、あるいは社会教育施設ボランティアといわれていた。

まず、筆者の1978年からのヌエック（現・国立女性教育会館の愛称）ボランティアの自主活動としての20年と、施設を離れてからの20年。合わせて約40年間の活動からみえてきたものをふりかえる。一貫したテーマは「社会教育施設ボランティアの魅力と可能性」だ。そこには多様化・国際化する時代のなかで市民の生き方としてのボランティア像もみえてくる。そのなかでの社会教育施設の役割や未来なども……。

ヌエックの開館は1977年秋。国連婦人の10年（1975年）の記念事業として設置されたといわれる。ボランティアの受け入

れはその1年後。そのオリエンテーションでの縫田〇子初代館長の言葉は昨年の本誌5月号で書いているので今回は省く。がそのとき、筆者にはもう一つの思いがあった。

当時、フリーの仕事で国立国会図書館を利用していた。明治時代からのファッションや風俗の婦人雑誌創刊70周年記念特集号の編集だ。一般の貸し出しでは埒があかず、特別のルートで何とか書庫に入れてもらった。ほとんど利用されることがなさそうな明治以来の婦人雑誌の書庫。オーバーではなくそこは埃と蜘蛛の巣だらけだった。そのときの思いが筆者に澱のように残っていた。閉ざされた公的な施設で市民が活動することの意味や可能性。縫田館長の言葉は何かはじまる予感のようだった。

【I】 40年間のボランティア自主活動の流れ



太久保 邦子
（おおくぼ くにこ）
出版社勤務後、PTAや地域活動、フリーランスライターの際ら、1978年（～1998年）ヌエックで情報図書ボランティア活動。同館の10周年に仲間と社会教育施設ボランティア交流会(Vnet)を立ち上げ、以後、セミナーや文部省委嘱事業「ボランティア・コーディネーター養成講座」「文化ボランティア全国フォーラム」他企画・開催多数。文部省生涯学習クリエイティブアドバイザーなど国や自治体の各種委員、講演・講座、執筆活動などで文化ボランティアの推進にとりくむ。編著書『文化ボランティアガイド』（日本標準）他。

今回の執筆に当たってこれまでの活動を一覧表にしてみる（表1参照）。ボランティアの自主活動は役所や企業などのような年次を越えた計画的な事業ではない。そのため、微妙なゆらぎがみれるのも確かだ。しかし、そこには初発からのテーマを追い求める活動の一貫性もみえてくる。

①ヌエックの開館5周年記念に「図書室ボランティアのパネル展示」

最初の自主活動は開館5周年の記念事業だった。当時、情報図書室（現・情報センター）のボランティアは22名。曜日も活動内容もちがったので交流はあまりなく……。そこで提案して情報図書室内の新聞、戦前の婦人雑誌、地方から送られてくる記事などを総当たりしてボランティアに関するキーワードを抽出。整理・分類して「考えよう！女性のボランティアとは？」のパネル展示に。この活動が仲

<Vnet 社会教育施設ボランティア交流会の主な活動> 表1

① ヌエック 5周年情報図書室ボランティア主催パネル展示「女性ボランティアとは？」(1982年)
② ヌエック 10周年記念：社会教育施設ボランティアについて考える交流会 (1987年) 「限らない可能性を求めて」
③ 第2回：社会教育施設ボランティア交流会 (1988年) ～限らない可能性を求めて～ 「いま、生涯学習のとき」
④ 第3回：社会教育施設ボランティア交流会 (1989年) ～限らない可能性を求めて～ 「いま、生涯学習のとき」
⑤ 第4回：社会教育施設ボランティア交流会 (1990年) ～限らない可能性を求めて～ 「いま、生涯学習のとき」
⑥ 第5回：社会教育施設ボランティア交流会 (1991年) ～限らない可能性を求めて～ 5周年記念誌「生涯学習ボランティアの現在そして未来」発行 (石橋財団助成事業 1992年)
⑦ 第1回：Vnet セミナー「生涯学習ボランティア&社会教育施設」(1994年)
⑧ 第2回：Vnet セミナー「活動の場を探る・創る」(1995年) ～社会教育施設と生涯学習ボランティア活動～
⑨ ヌエック開館 20周年記念事業 & 記念誌発行 (女性の社会参加支援特別推進事業 1998年) 記念誌「嵐山発 '97 未来をひらく生涯学習ボランティア」(1998年)
※第3回～6回は<文部省委嘱：ボランティア・コーディネーター養成・研修プログラム開発事業>として ⑩ 第3回 Vnet セミナー (1998年) 「本当のボランティア・コーディネーターになるために」 ～実践的・先駆的学習体験のあなたとわたしの5日間～
⑪ 第4回 Vnet セミナー (1999年) ～プログラム開発と活動現場からの提言～ 「生涯学習ボランティア・コーディネーター養成講座」
⑫ 第5回 Vnet セミナー (2000年) ボランティア・コーディネーター養成講座 「現場」が集う
⑬ 第6回 Vnet セミナー (2001年) ボランティア・コーディネーター養成講座 「出前講座：地域で結ぶ ～仙台・千葉・三重～」
⑭ 第7回 Vnet セミナー「学び合う官と民」～ボランティアの本当の自立を考えませんか！～ (2002年)
⑮ 第8回 Vnet セミナー「組織」に個人はどう向き合うか ～社会教育施設とボランティアのコラボレーション～ (2003年)
⑯ 第9回 Vnet セミナー「市民参画の仕組みづくり」 ～社会教育施設とボランティアのコラボレーション～ (2004年)
⑰ 「ボランティア通信」発行 NO.1～NO.36 (1989年～2004年)
<上記以外の主な活動>
(1) 1994年秋 第13回 IAVE 世界ボランティア会議フィールドビジット ヌエックにて開催 主催：ヌエックボランティア実行委員会 協賛：国立女性教育会館
(2) 1994年～2003年：社：日本青年奉仕協会主催「全国ボランティア研究集会」全国運営委員
(3) 1998年～1999年：「社会教育施設ボランティア研究会」(代表：鈴木眞理東京大学助教授 当時) の一員として、Vnet 事務局3名が全国的な実態調査に参画。文部省科研費事業
(4) 2002年～2005年：「社会教育」誌に連載「社会教育施設を核にした市民と行政のコラボレーション」 ＜探訪＞として19本を。(執筆：大久保邦子) 表2 (31頁参照)
(5) 2004年：『文化ボランティアガイド』(株：日本標準 監修：大久保邦子)
(6) 2006年～2008年「文化ボランティア全国フォーラム」全4回 文化庁委嘱 主催：実行委員会

間同士のつながりになった。しかし、パネル展示だけでは一方通行で来館者の声は聞けない。「そうだ、交流会だ！」そのとき10周年の交流会開催を密かに想定する。

② 10周年、初めての「社会教育施設ボランティアについて考える交流会」

当時、個人登録の会館ボランティアは約70名。10周年の記念事業に情報図書室ボランティアとして交流会開催を提案する。が、予算

もなく、不可能と思ったのか賛同者はほとんどなし。そのとき、飛び入りの職員の「参加者が1人もいなかったら、会館ボランティアの勉強会にしたらどうですか？」のひとことで流れがかわった。

そうと決まるとボランティアは動きが早い。5000円のカンパや手づくりの小物の販売などでアツという間に資金が集まる。記念事業では交流会の他、会館案内や模擬店、野

立ての接待、館内情報を伝えるプロ顔負けの写真展、ヌエック名物といわれた野の花の生け花……などなど会館ボランティア総出の記念イベントになった。

福祉関係のボランティア全国集会は先行していたが、当時、社会教育分野の交流会は初めてということで大きな反響を呼んだ。

「この灯を消さないで！」と力強く発言したのは、会場にいた塩ハマ子文部省初代婦人教育課長(だったということを知ると)。昼休みに慌てて用意したB4模造紙四分の一のアンケート用紙には「来年もぜひ！」という参加者の声、声、声……。大変だったが楽しかった。一同やりがいを感じた(答だった)。

③その後、限らない可能性を求めて「交流会」開催

10周年では「ヌエックの10周年記念事業」という大義名分があった。が、その後は組織も資金も何もない。あらためて個々のボランティアをつなぎ、実行委員会を呼びかける作業から始まる。頼みはミュージアム社会教育施設ボランティアの可能性を模索する夢と10周年記念参加者の「来年もぜひ！」という声援！それらの声を「力」にしてその後、毎年秋に「交流会」を開催し、毎回レポートを発行することになる。

④「交流会」から「Vnetセミナー」に

「交流会」は、5周年を経て「Vnetセミナー」に。当初、内容にはそれほど変わりがない

いようだったが敢えて「セミナー」にした。単なる交流や学習会ではなく、思いを発信する「社会性」を持たせたかったのだ。行政主催の学習会なら毎回同じ切り口でよかったと思うが、主催するボランティア自身も学ぶ。学んでステップアップするという視点だ。

Netとは、へ社会教育施設ボランティアのネットワークという長つたらしい名称を、略してNetとしただけだったが、いつの間にか頭につけたり、愛称として独り歩きするようになった。

⑤ ヌエックからの巣立ち

1997年。開館20周年には、ヌエックボ

ランティアアフエステイバルとして「女性施設とは何か」「そこで活動するボランティアとは何か」といったシンポジウムや、歴代4館長の「公開座談会」、ワークショップなどさまざまな取り組みを1年間やり、それらすべてを収録したレポート「嵐山発、97未来をひらく生涯学習ボランティア」



ティア」を刊行。（平成9年度文部省委嘱「女性の社会参加支援特別推進事業」）

ところでヌエックボランティアに定年制はない。ただ、筆者自身が20年を区切りとしてくつ施設ボランティアをやめた。当時Netの事務局は会館のボランティアルームだったが、同時に事務局の自立を示唆される。事務局を持てるほどの経済力はない。万止むなく筆者の自宅に移す。当時は大いに戸惑い、悩んだが、「こどもの自立を促す親心」ではなかったかと、今に思う。

⑥ 学び合いの学習活動から提案する市民学習会へ

その後、「文科省委嘱ボランティア・コーディネーター養成・研修プログラム開発事業」を4年連続で受ける。もちろん会場は勝手知ったるヌエックだ。これまでのヌエックボランティアの自主事業という、ある意味での枷がはずれたことでもいい。行政がやるのではない観点を込めたと思った。国立社会教育研修所の専門官の

方々から「ボクたちには出来ないものを作ってほしい」とアドバイスを受け、公務員のある種の縛りを垣間見る思いだった。評価もされたが、それ以上に楽しかった。

★いよいよ本当の自立

委嘱事業のあと、資金も事業費もなかったが、セミナー企画・開催の経験と醍醐味が私たちに残った。ボランティアの主催だから人件費はゼロだ。無料で使用できるヌエックという「場」があつたのが何より有難かった。

4年4回の委嘱事業を経たあとのNetセミナーのタイトルには、市民活動的な気概が見える。（表1参照）

課題をそのままセミナーのタイトルにして、参加者にストレートに呼びかける。終了後は毎回、内容をすべてテープに起こしてレポートにまとめ、参加者や関係者に送付したり、ヌエックの売店で販売したり。レポートの「はじめに」の言葉にはそれぞれの趣旨が書かれている。ちよつと長くなるが、その一部を紹介する。

★第8回セミナー「組織」に個人はどう向き合うか」

「長年ボランティア活動の推進みたいなきととりくんできて、一貫してながれている課題は、へひとり一人の自立と自律」ということだったように思います。（略）ところで私たちは、公務員であれ、会社員であれ、NPOやボランティアの活動であれ、社会生活

『社会教育』誌 連載一覧 表2

社会教育施設を核にした市民と行政のコラボレーション＜探訪＞

第1回	「せんだいメディアテーク」はなぜ成功したか？ (仙台市)	2002年1月号(667号)
第2回	“共進化”をめざし前進する 「兵庫県立人と自然の博物館」はなぜ成功したか？ (兵庫県三田市)	2002年2月号(668号)
第3回	市民が企画・運営を担う「すみだ学習ガーデン」 ～市民が本当の主体になれるか否かの試金石の試み～(墨田区)	2002年3月号(669号)
第4回	女性施設は“共育ちの場” (秋田市)	2002年4月号(670号)
第5回	まちづくりの地殻変動が始まった ～真田宝物館の若き学芸員と市民～(長野市松代町)	2002年5月号(671号)
第6回	過疎や地方文化、森林を守る「樹恩ネットワーク」 ～大学生協のコーディネートで“協働社会”を推進～ (杉並区)	2002年6月号(672号)
第7回	図書館ボランティアの原点を求めて ～秋田市新居図書館ボランティアの“昔話絵本原画展”に学ぶ～ (秋田市)	2002年8月号(674号)
第8回	夢を育み続ける富田美術館のサポーターたち ～新美術館建設国際コンペで“世界”が村にやってきました～ (群馬県勢多郡東村)	2002年9月号(675号)
第9回	未来の科学者を育てる夢と仕組みがいっぱい！ ～日本一のボランティア集団をめざす日本科学未来館～ (江東区)	2002年10月号(676号)
第10回	交流と協働の“新しいかたち”を模索 ～「はしかけさん制度」を掲げる琵琶湖博物館～ (滋賀県)	2002年12月号(678号)
第11回	記念イベントがもたらす協働のかたち ～“人博”開館10周年とボランティアメッセ2002～ (兵庫県三田市)	2003年1月号(679号)
第12回	「森と海と人」を育む自然回帰への壮大な夢 ～観音崎の自然を紡ぎ、つなげる人びと～ (神奈川県横浜須賀町)	2003年4月号(682号)
第13回	“ボランティアメッセ2003 in 江戸博” 首都圏のミュージアムボランティア大集合！ (墨田区)	2003年6月号(684号)
第14回	ボランティアと施設職員の“共育ち”のかたち ～今、北海道開拓の村で起きていること～ (札幌市)	2003年8月号(686号)
第15回	協働の仕組み作りに本気で挑戦しはじめた市民たち ～組織の進化を視野に入れた大田文化の森の試み～ (大田区)	2003年10月号(688号)
第16回	「金沢市民芸術村」が目指すもの ～官・民協働のタバネストリーはどこまで織り込まれるか～ (石川県金沢市)	2004年2月号(692号)
第17回	市民参画の仕組み作りを目指して ～第9回Vnetセミナーレポート～(埼玉県国立女性教育会館)	2004年6月号(696号)
第18回	～文化ボランティアの本作りにかかわって～ 「わかる言葉」でつたえようということ	2004年10月号(700号)
第19回	～なぜ古都鎌倉で社会教育の協働作業が実現したか～ 生涯学習センターの事業を市民が担うプロセスで見えてきたもの	2005年1月号(703号)

を送っている以上、大抵の人は組織に属しているか、或いは、個人として組織とつき合ったり、向き合っているのではないだろうか。役所や企業といった組織の中で個人の思いや行動はどう担保されているのだろうか。或いは地域で動くとき、自治会やPTAとどう向き合ったらいいのだろうか。いっぽう、このところ世間を騒がせたのが、企業による食肉の不正操作や外務省の機密費

問題などなどで官民あげての組織内犯罪の数々でした。大企業や役所のひとり一人は優秀な個人でも、組織人間になれば人格は別なのか。組織に対して人は無力なのか。(略) ⑦ 活動をつなぎ、広げた「ボランティア通信」の発行

9年10月から2004年10月の36号まで。ヌエックやEPAの活動、社会教育施設ボランティアのこと、情報センターの関連情報などけっこう満載だった。いわば情報の拡散だ。力になった。ネットワークの力だ。

【Ⅱ】Vnetの自主活動からみえてきたもの ◆ ホンネを集める

10周年記念交流会のタイトルは「限りない可能性を求めて」社会教育施設のボランティアについて考える交流会。呼びかけ文の最後は、「社会教育施設ボランティアの現状と将来を、活動する仲間同士が出会い、ホ

ンネで話し合いませんか？」(傍線筆者)。この末尾の呼びかけに魅かれて参加した人も多数。行政主導の状況下でなかなかホンネが出せない施設ボランティアの状況が伺えた。

「交流会」を続けて5年目。それまでをまとめた記念特集号「生涯学習ボランティアの現在そして未来」を刊行する。(石橋財団助成事業)。

その裏表紙見開きに仲間が描いた見事なタンポポのカットがある。左端下にタンポポの一株、画面右上に舞い上がる数個の穂先。その上方空間に数行のコピーがある。

「ひとつひとつの本音を集めていくと、何が見えてくるかも知れない。ひとりひとりが動きはじめると、何かが動きはじめるかも知れない。この“交流会”はそんな思いの中

から産声をあげました。この冊子は、そんな中でのひとりひとりの声を集めてつくられたものです。」……印刷所の人を待たせていたとき、とっさに認めたものだが、あらためて私たち自主活動のコンセプトの原点が込められていることに気づく。

◆施設ボランティア活動は「市民の行政参加」の一形態である

第2回目の交流会（1988年）での名古屋市婦人会館ボランティアの言葉だ。名古屋市では行政側である婦人会館と市民ボランティアの位置づけをきちんと定義していたのだ。行政と市民の協働の視点が提示されたその先見性に参加者一同おどろく。

◆ボランティアのネットワークは乱反射する

第1回Vnetセミナー（1994年）で、コーディネーターの藤原房子さん（当時…日本経済新聞編集委員）のネットワーク論が話題になった。「施設の」ボランティアは、大切にされない逆のアメーバのようにのびやかに乱反射する。行政のきちつとした枠組みの中におさまりきらないで勝手なことをしてマインナスになることもあるかもしれないが、アメーバのように連携して、キラキラ輝くことがある。行政と草の根は、そこらを出発点にすることも大切なのではないか。」……蓋し、言い得て名言だった。

◆施設ボランティアは「制度化ボランティア?」「行政の補完?」

施設の活動を補完する文脈で施設ボランティアは「制度化ボランティア」といわれ、ボランティアの全国集会などで「行政の補完」論が注目を集めていた。筆者自身はヌエックの情報整理であるクリッピング活動で充実していたし、その活動が施設に還元されるならおおいに結構だった。

しかし、なぜそのようにいわれるのかを確認したくて、当時、JYVA…日本青年奉仕協会主催の「全国ボランティア研究集会」に参加する。ほどなく運営委員を委嘱され、企画運営の裏方の仕事にも関わることになり、そのエネルギーに圧倒される。社会教育施設ボランティアとの違いにふれ、大いに学び、「制度化ボランティア」「行政の補完」ということの意味を暗に学んだような気がした。

◆「世界ボランティア会議」第13回I A V E 世界会議」

1994年、東京で開催されたこの会議で、筆者も分科会の1つ「生涯学習としてのボランティア活動のあり方」を担当。

学びの1つに「ボランティア活動は行政の補完」があった。あるとき、北欧のボランティア指導者が「ボランティア活動は行政の隙間を埋める補完なのです」と敢然と発言されたのだ。なぜかストンと腑に落ちた。

この世界会議の活動で学んだもうひとつは「Think Globally Act Locally」（地球規模で考え、身近なところから活動する）だった。

聞きなれていたフレーズではあったが、世界会議のなかでの響きはなぜか納得。身にしみた。

【Ⅱ】社会教育施設ボランティア

4つのキーワード

ボランティア活動での学びは計り知れないが、ここでは活動から学んだ社会教育施設ボランティアに関するキーワード4つを挙げる。

①草の根のオンブズマンの視点

本誌1992年11月号「提言…生涯学習ボランティアを語る」で、筆者も提言させてもらっている。タイトルは「施設は受け入れを!!」で、サブが「社会教育施設ボランティアの現場から思う」。

当時、社会教育施設ボランティアの受け入れはまだはじまったばかり。ほとんどの施設が二の足を踏んでいた。主な理由は「当方では職員の運営で充分こと足りているので受け入れていない。」または「ボランティア担当の職員を置く余裕がないから受け入れられない。」の2つ。ボランティア導入の視点・理念からは程遠いものだった。

そこで筆者の提言は「社会教育施設ボランティア活動が、個人の生きがいや人間性の育成、施設への貢献という視点を越えて担いつつあるもう一つの側面がある。それは行政と地域住民をつなぐ『草の根のオンブズマン』

の視点だ。失われつつある人間性や地域社会が活性化する鍵がこれらの活動にかかっているような気がしてならない。」

あるとき職員がすれ違いざまに「『オンブズマン』って、きつい言葉ね」と囁いて駆けで行った。そのときこの言葉は以後禁句にしようと思ったが、ほどなく某国立研究所主催のシンポジウムで筆者の紹介にこの提言の内容を使って紹介される。明らかに肯定の文脈だった。同じ国家公務員でも真逆の人たちがいることを学んだ一件だった。

もう一つ付け加えるならば、「オンブズマン」をしようと思っただけ活動をするボランティアはいない。気がつけばそのような役割を担っているということだ。

②共に学び合い・育ち合う場

社会教育施設は、利用者同士、利用者とボランティア、ボランティア同士、ボランティアと職員が、そして職員同士が、或るときは支え合い、或るときはぶつかり合いながら、共に学び合い・育ち合う場だ。

そんな実際を紹介するのが、本誌連載の2003年8月号「ボランティアと職員の『共育ち』のかたち」の「北海道開拓の村」だ。その「共育ち」の様子が拙稿に詳しい。当時学芸員だった中島宏一さんは、ナント今、開拓の村の村長（館長）さんだ。学芸員からスィスイとのぼりつめたのではない。人生経験豊かなボランティアの人たちに教えられ、生

涯学習といわれる社会教育施設ボランティアの奥義を知ろうと、学芸員の仕事をこなしながら北大に通い、大学院博士課程まで。もちろん単なる資格の取得が目的ではない。それらの学びを通常のボランティア活動はもとより、毎年の道内外の研修旅行（用意された分厚い資料に魅かれて参加するボランティアも多数！）、毎年開催された北大キャンパスでの「博物館ボランティアの集い」などにパーフェクトに活かされる。見事な「共育ち」の実際だ。

③行政（施設）を補完しながら自己実現する行政（施設）の補完ということの問題視

することが多い。筆者自身、活動が施設に還元されなければ意味がない、やりがいがないと思っただけがある。自ら提案してやった新聞整理（クリッピング）の活動で充実した日々だったが、本当に利用され、活用されているのか疑問に思い、職員に訊ねたことがある。資料整理をボランティアがやるまでは職員がやっていた作業なので職員も助かるし、利用者の数は少なくともそこに資料があるということが情報センターとしては意味があるといわれ納得したのであった。

④ボランティア活動はしなやかに乱反射してネットワークする

タテ組織といわれる行政組織のなかで活動するボランティアは、施設とのずれや行き違いも多い。行動原理のちがいはときに爆発も

するが、それをプラスのエネルギーに替えて発散させることで大きな力、学びになる。

Netの活動がまさにそれだったのかもしれない。学習活動は「進化・深化」するものであることを実感する。

Ⅳ文化ボランティアと社会教育施設の未来

◆あらためて文化ボランティアとは
今回、これまでの活動をふりかえりつつ、社会教育施設に機軸をおくボランティア活動を考えてみて、文化ボランティアに重なる部分が多い、というより文化活動そのものだと痛感する。

河合隼雄文化庁長官（当時）による文化ボランティアのとりあえずの定義は、あまり難しく考えないとして、「文化芸術に自ら親しむとともに、他の人が親しむのに役だったり、お手伝いをするようなボランティア活動」というもの。別の表現では「芸術文化のボランティア活動で平和につながる市民が育つことが、軍備にお金をかけなくて済む」とも。文化ボランティアの奥深さを感じさせるものだ。

生涯学習に重なる文化ボランティア活動の守備範囲もまた深くて広い。生涯学習には「限らない可能性」があり、そこには「進化・深化」もある。それが市民活動に転化されたとき、新しい未来が広がるのではないか。そんなことに気づかされる。

◆社会教育施設ボランティアの未来

今回、久しぶりにいくつかの「ミュージアム」に問い合わせたり、ネットで調べて思うことがあった。「ミュージアム」が二極分化、あるいは、大きく多様化しているということだ。すでにお気づきのように今回の執筆では、社会教育施設に「ミュージアム」のルビをつけさせていただいた。

いま、世の中の時代の変化・変容はすさまじい。ミュージアムでパーティや物品の販売をやるかと思うと、お寺のコンサート、書店の図書館化などなど軽やかに垣根を越える。性のボーダレスもスビーディだ。社会教育施設とミュージアムが混然一体にとらえなくなった理由もそこにある。

もう一つの二極分化について。東京国立博物館や江戸東京博物館などのような国公立のミュージアムはどこも人気があって、ボランティア活動も狭き門だ。いずれも定員の2倍3倍の応募者があるという。大抵レポート提出と面接で採用がきまる。定員ということに疑問を感じるかもしれないが、限られた施設運営をサポートするという縛りがあるからだ。

活動はあらかじめ月二日程度が決められており、これをクリアしなければ失格になる。いっぽう、緩やかな博物館の代表は神奈川県横須賀市の観音崎自然博物館だ（本誌連載で2003年4月号に掲載）。いつでもだれ

でも歓迎で年会費30000円を納める。但し、緩やかな中の厳しさがある。森と海の豊富な自然。生熊展示を管理運営するなどボランティア活動の厳しさであり、楽しさだ。会費を払ってでも活動をするボランティアが常時50名、60名いるという。

社会教育施設ボランティア、バンザイだ！

結びにかえて

★市民意識にもとづく社会参加

本誌1987年3月号「今月のことば」は、吉澤英子さん（当時・東洋大学教授）の「ボランティア活動の意味を問う」だ。1957年当時、ボランティア東京ビューローの設立に際し、ボランティアという英語をどのような日本語にするか長時間の協議を重ねたという。

「……奉仕者という言葉の背景には自己犠牲を迫られるようなひびきがある。もともと広い明るいイメージが欲しい……云々と。そして市民意識にもとづき社会参加を積極的に推進するという、新しいイメージを期待して英語をそのまま使用することになったのである。」（原文のまま。傍点は吉澤氏自身）。

この話は又エックでの当時のボランティア講座で直接お聞きしたおぼろな記憶があったが、今回手元のバックナンバーを拝見していて、大いに納得だった。

生涯学習ボランティアであろうと福祉のボ

ランティアであろうと「市民意識にもとづく社会参加」は原点なのだ。

★ネットワーキングの力

ネットワーキングという言葉に関して、忘れられない「出会い」がある。人ではなく「ネットワーク」という言葉にだ。たしか1990年代半ば、『ネットワーク』という本を書いたアメリカ人のリプナック&スタンプス夫妻が来日して、日本初の「ネットワーク会議」が明日開かれるという新聞夕刊の記事。すでに定員で締め切られたということだったが、ともかく会場の飯田橋「家の光」に出かけて、とにかくもぐりこんだ。ざわざわした会場なのに、夫人の「世界を救うのは国連ではなく、NPOのネットワーキングだ」という言葉が電撃のように脳裏に焼き付いたのだ。以来、その言葉に注目するようになり、活動するなかで納得してきたように思う。市民ボランティアにとつてネットワークは、限りなく大きな力になることを実感している。

いま私の注目は、本誌でも活躍する「たま社会教育ネットワーク」の若者たちだ。ひとりでは微力でもネットワークすることで拡散するのだ。そのことを筆者自身、社会教育施設又エックを活動の「場」として学んだ。

Re:Design社会教育の集いが、日本青年館を「場」として、しなやかに乱反射していく未来を楽しみにしている。